量がいいもので、 に出ようとしませんでした。とうとうお嫁さんはいいました。 む か あるところに、 若者は、 若者が 毎日、 お嫁さんの顔ばかり見ていて、 いて、 器量のい いお嫁さんをもらいました。 いっこうに田 んぼへ仕事 あんまり器

して、 なくなるよ。 「あんた、 見ながら仕事をしてくださいな」 あんた。 わたしの姿を紙に描いてあげるから、 そんなに毎日わたしの顔ばっ かり見て仕事しなか それを竹にはさんで田んぼのあぜにさ ったら、 食べ て 11 け

「ああ、わかった」

をしました。 若者は、 お嫁さんに絵を描いてもらうと、 田んぼのあぜにさして、 それを見ながら仕事

ところがあるとき、 大風がふいてきて絵が飛んでいってしまいました。

「ああ、えらいことになった」

なってしまいました。 若者はあとを追いかけていきましたが、 絵はどんどん飛んでいっ て、 とうとう見えなく

お嫁さんの絵は、 お殿さまの屋敷まで飛んでいきました。 お殿さまは、 庭で絵を拾うと、

「この女、どこにいるのか探してこい」といいつけました。

「なんと器量よしのきれいな女だなあ」

といって、家来に、

家来は、 絵を持ってあちこち探しあるいて、とうとう若者がお嫁さんと暮らしている家

を見つけました。

お殿さまは、若者をよびつけると、 むつかしい問題をふっかけました。

「灰で縄をなっ て持ってこい。 そうすれば絵は返してやる。 できなかったらおまえの嫁を

わしによこせ」

若者は

「灰で縄なんてなえるはずがない」と、 青くなって帰ってきました。 お嫁さんは

ました。 から燃やしたら、 「そんなこと、 わけはない。 そっくり灰縄が わらをよくたたいてやわらかにして、 のこりますよ。 それを持っ ていけばい 塩をつけて縄になっしゃ **\ んです」 て

若者はお嫁さんのい ったとおり、 わらをたたい て塩をつけ、 縄になって燃やして灰縄を

作りました。そして、お屋敷に持っていって、

「灰縄を持ってきました」と、さしだしました。

すると、お殿さまは、こんどは、

「では、打たん太鼓の鳴る太鼓を持ってこい」といいました。

若者が、青くなってうちに帰り、

「打たなくても鳴る太鼓なんてあるだろか」というと、 お嫁さんは、

音をたてました。 れて皮を張ると、 に入れてから、 「そんなこと、 太鼓に皮を張ればいいんです」と教えました。 わけはない。 ミツバチが太鼓の中から出ようとして皮にあたって、 畑に飛んでるミツバチをたくさんつかまえてきて、 若者がミツバチを太鼓に入 ブンブンドンドン 太鼓の

若者は、お屋敷に太鼓を持っていって、

「打たん太鼓の鳴る太鼓です」といって、さしだしました。

お殿さまは、

「では、こんどは、 この曲がった九穴の貝に糸を通してこい。 通せなかったら、 おまえの

嫁をわしによこせ」といいました。

若者がまた青くなって帰ってくると、お嫁さんが、

と教えました。 をつけたアリを入れたらいい 「そんなこと、 わけはない。 んですよ。 貝の穴の入口に黒砂糖をぬって、 アリは黒砂糖を慕っていくから、 反対がわの 穴から、 糸が通ります」 細い

んとうに糸が通りました。 若者がいわれたとおり、 貝の お屋敷に持ってい 入り 口に黒砂糖をぬって反対がわからアリを入れると、 くと、 お殿さまは、 ほ

「おまえはか しこい 1 V 嫁をもらったなあ。 V つまでも嫁をだいじにするんだぞ」とい

おしまい。

村上郁再話

資料『雪国のおばばの昔』水沢謙一/講談社